今昔物語 第65話

考古資料精選⑦
刻骨

昭和33年、市内南部を流れる鍋田川の砂防堰堤建設の際に出土したもので、鍋田川遺跡（中垣内所在）発見の契機となった遺物です。共に出土した土器から、古墳時代前期（約1600年前）に使用されていたものと思われます。

長さ19・8㌢、厚さ2.9㌢、重さ99㌘、鹿の角が使用されています。表面に溝を刻み、その部分がすり減っていることから、何らかの道具をこすりつけて音を出していたことが考えられます。

本来の用途は明らかではありませんが、祭祀道具、日本の民俗楽器である「ささら」の原形などさまざまな説があります。ただ、この刻骨については卜骨状のイノシシの肩甲骨や、滑石製の有孔円盤と呼ばれる祭祀に使用する道具と共に出土していることから、やはり何らかの呪術や祭祀に使用されていたものと思われます。

当時、鍋田川は洪水を頻繁に起こす暴れ川であったことから、その災害の予知、あるいはそれを鎮めるために使用していたのでしょうか。

この資料は歴史民俗資料館のホームページでも紹介しています。

今昔物語 第66話

考古資料精選⑧
木製戸口装置

昭和62年、北新町遺跡内の府営住宅建て替えに伴う発掘調査で出土しました。

すべての部材を組み合わせると高さ約1.6㍍、幅約1.4㍍の大きさに復元出来るもので、もみ材で作られています。

古墳時代中期（約1500年前）と考えられる井戸の井筒として転用されていたもので、板扉、鴨居、板壁、柱材など、敷居を除いた扉材のほぼすべてが利用されていました。井戸の北方、約30㍍の地点には倉庫と思われる大型の掘立柱建物跡が見つかっており、建て替えていた状況もうかがえることから、おそらくその際の古い扉材が井筒に再利用されたものと考えられます。

弥生～古墳時代の扉材の出土は寝屋川市讃良郡条里遺跡で5枚の板扉が出土するなど、全国で約29遺跡53例ほどが知られています。しかし、この資料のように扉材一式がそろった状態での出土例はなく、当時の戸口構造を復元出来る実物資料としては全国的にも唯一の資料と言えるものです。

なお、この資料は平成3年に市の指定有形文化財に指定されています。